

深呼吸を二三度繰り返していると、朝のあまい空気が胸いっぱい流れ込んでくる。

私は庭はきにかかった。朝露をしつとりとふくんだしぼふが朝日に照らされて真珠の玉のように光っている。

さつさつと箒が大きくなびくと、もみじの落葉が一とところに集ってくる。やっとおちついたもみじはだんだん集ってくる。四号室のところまでやっとならば掃きためたかと思うと、さつと風が吹いて、一枚飛び二枚飛ぶ、しまいには、もとの一号室あたりまで逆戻りしてしまった。

もみじは、

「やっぱりお母さん木の所がいいや」というようにかたまっている。

私は持っていた箒でもみじをそつとなでてやった。

「もみじさん、あなたは落葉になったんだから、もうゴミと一しょよ。」

さあ沢山のお友達のところへ行きましよう」

といって掃きはじめると、もみじは風に吹かれて、又私の箒のそばに集った。

かわいそうに落葉ともなればお母さん木から離れるのね。

私のもみじを掃きながら自分のことを考えはじめた。私も病気になるってお母さんのそばを離れる時、とてもつらかった。保健所の人に来て、

「早くお友達のところへ行つて、みんなと楽しくしましよなね」

と言われたことを思い出した。私も、このもみじと同じようにお母さんと別れて来たのだわ。

そうだ、このもみじもきつと悲しいにちがいない。少しの間でもいたわってあげよう。私は掃くのをやめて、そつと手で拾って友達の所へつれていってやった。

「さあ、今日から仲よく遊びなさいね」

といいながら、ゴミ箱のふたをあけてやった。もみじはあきらめたように、みんなの上にしずかに重なりあった。私はしばらく箱の中を見つめて立った。赤いもみじ、茶色のもみじ、黄色いもみじ、いろいろある。その中でほんのり赤くそまったもみじは一番私の目についた。このもみじが今すてたばかりの中の一つだからである。しかし、このもみじはもう永久にお母さん木の所へは帰れないのだ。

私は故郷のお母さんがなつかしくなった。

「帰れたらなあ」と小さい声で言うてみた。

玄関へ入って行こうとすると、寮母さんが「ごくろうさん」と言われた。

今日は故郷のお母さんへ手紙を書こうと思った。